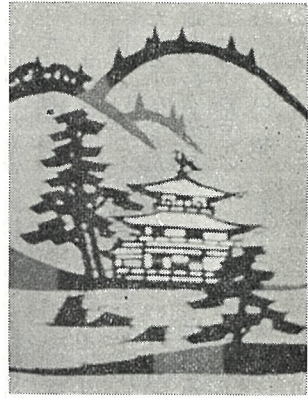




皆川泰蔵え

随 想

夜の富雄駅の怪事

滝 川 正

夜十一時五十分、それまで平穏な奈良盆地の夜景を窓に映して走ってきた近鉄阪奈線の電車が、富雄川をまたいで高架になっている富雄駅に近づいたとき、奇怪な出来事が始まった。サラリーマンらしい一人の若い男が、つと立って扉の方へ歩き出す

と、多くの人が一斉に立ち上って最前部の扉へ殺到した。電車が止って扉が開くと、五十人ほどの人の塊が、わっとホームにとび出し、そのまま一団となって階段を駆けおりて行った。

ある者は二段跳び、ある者は三段跳び、そして四段跳びの者もいた。私が思わず「あぶない」と思ったとき、背広姿の勇敢な四段跳びの男が足を踏み違えたのか、したたか床にたたきつけられていた。改札を出たその一団は駅前のタクシー乗場に、たちまち長蛇の列を作った。私と二人の女性がその列の後に並んだが、最後に幼児を連れた若夫婦が階段をおりてきて最後尾にいた。

タクシーは全部で十台ほど、片道二キロの住宅公団富雄団地へ往復八分のピストン輸送をする。六人乗りの中型車に乗るのは一人ずつ、従って最後尾にいた若夫婦は、寒風の中で「寒い」と泣く幼児をあやしなから三十分余り待たされ、家に辿りついたのは十二時半ごろであつたらう。

バスの最終は十時四十七分、バス会社自身の採算とタクシー会社の圧力との両面か

ら時間の延長はできない。タクシー会社は、階段をとびおりるときとは打って違って羊のように柔順な行列の人々を、殊さらに増車して早く運ぶ必要は毛頭ない。相乗りも水揚げを落すことになるので運転手は厭がり、粗暴運転で抗議の意志を表明する。自分の番がきた人は、もはや他人だけのために敢えて相乗りを誘おうとはしない。こうして、毎夜富雄駅では、階段跳びおり競争がくり返され、女子供は風邪をひくのである。

たった一つの例ではあるが、現代の資本主義社会における非人間的様相をよくあらわしている出来事である。沖繩のことも、ベトナムのことも非人間化の顕著な例であるが、私たちがこれらのことに目をふさぎ、自分だけの小さな幸せをのみ追求するとき、私たち自身の心が知らない間に非人間的なものになっていっているのではないだろうか。私たちが人間であることを続けるということとは、もはやすべてを非人間化する現資本主義体制と闘うことを抜きにしてはあり得ないのである。

二千年前、イエスは人間が真に人間であ

るためには愛による自己変革がなされなければならぬことを主張して、当時の旧約の体制と命がけで闘って処刑されたのである。贖罪、復活といった神話的ドグマを打ち破って、このイエスこそ現代のすべての人々の前に再登場しなければならぬ。

大学は本来人間のための教育と研究の機関である。非人間化の波に抵抗し、人々の先頭に立って体制と闘うのが真の大学の使命ではないだろうか。そうでなければ、大学は「ききめのない塩」でしかないであろう。

（人文科学研究所職員）

わが家の猫は哲学する

山 田 忠 男

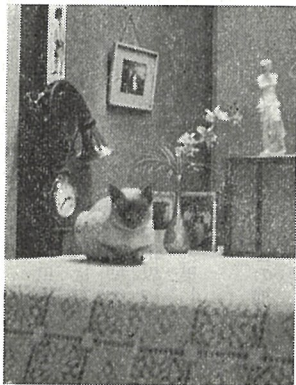
大学の紛争が世界中に拡がる頃、わが家に猫がきた。戦前から数えて三代目だから、唐様で書いてユニと呼ぶ。

さて、まつりごと悪く世の中乱れる近年、私は柄にもなく哲学の重要さを痛感していた。そしてわが家の猫はまぎれもな

く、哲学するのである。どのようにして私
がこれを知ったか？

始め、ウイスキーの空箱に入れられて靴
の中にあった時、暫らくはニャーニャーな
いた。しかしじきにそれは止んだのであ
る。やがて靴から出してミルクを与える
と、匂をかいでからブンと横を向いた。逃
げようともしない。今度は車で高速道路を
—— 妙令の女性に抱かれていたせいか、実
に静か。こうしてわが家に入り、私のベッ
ドの下に寝場所をクッションでこさえ砂箱
のトイレも作ってやると、早速これで用を
足した後は朝までグッスリでビクともしな
い。

翌朝はパンと鯉節で食事らしいものをや
ったら、「ニャッ／＼」と軽くないないて食
べた。階段を下りそこなあって筋肉でも痛め
たのか、両手両足を揃えた正座の形で、ひ
ねもすを暮す。やがて数日のうちに元気を
恢復すると、広くもないわが家の中をわが
家のように荒れまわる。甘えたり媚びたり
などというジャラジャラした態度はミジン
もない。宗達の雷神のような顔をして家族
の手足に咬みつき、時にはピンタまで取る。
ゲバ棒そのけの有様で、その天衣無縫ぶ
りは見上げたもの。ただし、これだけで哲
学するとはいえない。実は毎日、何回も私
たちが見上げる破目になるのだ。



先ず、彼（ユニはレッキとしたシャム生れの男性なのである、家へきてから一月もして分ったのだが）は食べるものを食べる、と、エイツとばかりピアノの上にかける。そこは広くて障害物も少なく、絶好のプレイ・グラウンドなのだ。叱ろうとすると隅にあるステレオのスピーカーの陰にかくれ、手が見つからない。彼は更に、その上を目ける。わが家の最高美術品、国宝（？）クラスのドイツ製ハープ——しかもそのクラウン（柱の上にある飾り）の上へ、再び軽くエイツと唸って飛び上り、天下をヘイゲイするのである。

かくして哲学者ユニを知った。彼は床上二メートル直径十センチの金冠の上に端座し、瞑想し、哲学するのである。その状況は写真でご覧願いたい。

丁度、彼が哲学の道を辿りかけた頃、ケネディ未亡人の再婚が伝えられた。彼女の新夫などの比ではない。ユニはアリストテレス・ソクラテスではなく、ディオゲネスなのである。もっとも、大儒派ではなく、猫儒というべきだろうが——。漱石の猫やホフマンのムルが、文学的事実だけでなく科

学的事実なることを、私は改めて知った。

ひと度わが家が出ると、澁季末世ロクなことではない。殊に、社会的な地位が高くてその実は猫にも劣るヤツバラにいじめられる時、私はわが家のユニ・ディオゲネスを思い出して、ニヤリとするのである。

（工部部教授）

迷宮の扉

神谷雄績

わたしは捜しもとめている
創世前にわたしが持っていた顔を

イエイツ「螺旋階段」

私の生家は裕福ではなかったが、父が書籍の愛蔵家であつたため、書齋には堅牢な革装の蔵書が充棟していた。そのためであるうか、同年代の子供たちの読む漫画や少年雑誌を軽侮していたわけではなかったものの、父の書籍の方をより尊敬していた。私にとって、書棚に並んだ捺金の書物は

壮麗な神殿の扉であつたのだ。

それらの背に刻まれた不可思議な文字の形貌は、ベヒストウンの岩肌に刻文された楔形文字やカルナク神殿の神聖文字を目前にした時のように、文字の世界に踏込んだばかりの私に果しない失望と果しない夢を与えた。

それから十年余り、私はこの神殿の扉のことを忘れてしまつていた。慄える手で神殿の扉を披繙したいという渴望にも似た夢は、あの気の遠くなるような失望とともに、やすやすと私から乖離してしまつていたのである。

それは、貪婪で移ろい易い少年の心情が見えがくれた妖しい流し目を送ってくる怠惰と共謀して私を他の享楽へ誘惑したからか、或はそれらの書物を構築した巨人たちを黙殺することによって、自尊心の充足を企図しようとする青年特有の不遜さが、私に神殿の忘却を強いたためか、恐らくはそのどちらでもあつたであらう。

ともかく二十歳を過ぎて社会へ出た時、私は周囲の人々の私への反応の中に、私の人間性の反射とその相貌の醜悪さを看た。

私は神殿の忘却の代償として得た無知と放蕩とをくらい、まるで海に浸るかのよう
に時間の中に埋没し、瘦軀の遼豕と化しな
がら強健なソクラテスをさえ嗤っていたの
だった。

それを理解した刹那、私は己れが盲目的
に縋ってきた価値の全てが根底から瓦解し
てゆくのを認めざるをえなかった。激しい
痛みを伴った戦慄が私を駆け巡り、無残に
荒廃した精神の奥底で私は意識を失ってゆ
くを感じた。だがその時、一条の光がふ
るえながら私の裡に差し込んでくるのを私
は見た。

光の中に神殿があった。

斯くして、私は光に導かれて神殿の扉を
披いた。

その神殿の内部は、恰も錯乱した神の仕
業かと思えるほどに錯雑した微妙な、それ
でいて厳密には一つとして相似の形象のな
い迷宮であり、クレタ王ミノスがダイダロ
スに造営せしめたラビュントスばかりでは
なく、ダンテの辿った三界の全てをも包懷
しているかとも思えるような目も眩むばか
りの広大な宇宙であり、海と空とが遙かな

彼方で熱い抱擁に融け合うように、過去と
現在との間で幾重にも屈折し交錯した光が
無限の未来の闇に融けていた。その迷路を
私は、神殿の忘却の代償として得た無知と
放蕩とをくらい、まるで海に浸るかのよう
に時間の中に埋没し、瘦軀の遼豕と化した
私は混乱と驚異とをもって彷徨しながら、
幾人かの巨人の声を聴くことができた。そ
れは、詩人たちの不逞な絶叫と、傷ついた
反逆者たちのどす黒い呪詛の呻きと、清澄
な神の歌と、更には雄渾な歴史の怒濤など
であった。それらの交響の裡に、蒼氓の血
と汗と涙と叡智が危険なまでに秘められて
いるのを私は知った。

だが、私は今どこに佇んでいるのか。
恐しいほどの滋養に富んだ糧と、その故
に醜穢な銜字の斑模様を全身に生む猛毒を
孕んだ、文字と思想との混淆した帰結のな
い迷宮を、私はどう辿ればよいのか。

迷宮にとって電滅の存在でしかないこの
オデッセイアに、己れの実存と迷宮との諧
調の和声を聴く瞬間が訪れるであらうか。

(大学総務部職員)

有 終 館

先号から本誌の表紙は小野功夫氏(中
学校教諭)の有終館のスケッチになった。
有終館は明治十八(一八八五)年に竣工
されたアメリカ風ゴシック建築で、チャ
ペル、彰栄館について同志社では三番目
に古い建物である。設計者はチャペルと
同じくアメリカン・ボードの宣教師・グリ
ーン博士である。半地下室と屋根裏の物
置をあわせると四階建て当時の日本では
有数の大建築であった。元来書籍館とし
て建てられが、昭和二十四年以来全館事
務所となり、総長室、理事長室、大学長
室とこれに付属する事務室がある。落成
当時新島襄が事務室に使用した部屋が現
在の総長室で、明治四十五(一九一二)
年の大学設立事務もこの室でとられた。
大正六(一九一七)年玄関の位置を改修
してやや外観に変化を来たした。さらに
昭和三(一九二八)年十一月、火の不始
末から出火し室内、床、屋根を焼失した
が、コンクリートを流しこんで補強し現
在にいたっている。